

ブラジル日系移民社会における 「コロニア語」の位置

中 東 靖 恵

1. はじめに

ブラジルのサンパウロ市内にあるLiberdade地区は「東洋街(日本人街)」と呼ばれ、今でも日系人が多く暮らす。1990年代初頭、日本から来た日本人が、東洋街で戦後移民の日本人に日本語で道を尋ねたら、次のような返事が返ってきたという。

「そこのエスキーナでオニブスをペガしてシンクエンタセンターボ払って、プラッサ・ダ・レプブリカのポントでおりればいい」

これはブラジルの邦字紙「ニッケイ新聞」¹の編集長を務める深沢氏が、1992年春、初めてブラジルにやってきた頃のエピソードである²。「今のは日本語か?」と頭を抱えたという。

この発話の中で、カタカナ表記された語はすべてポルトガル語からの借用語である。それぞれ、「エスキーナ」=esquina(角)、「オニブス」=ônibus(バス)、「ペガして」=pegar(「つかむ」や「(交通機関に)乗る」という意の動詞pegarの直説法三人称単数現在形pegaをサ変動詞化)、「シンクエンタセンターボ」=cinquenta centavo(50センターボ)、「プラッサ・ダ・レプブリカ」=Praça da República(レプブリカ広場:場所名)、「ポント」=ponto(バス停)となる。

ブラジルの日系社会でよく耳にするこのようなポルトガル語混じりの日本語は、しばしば「コロニア語」と呼ばれる。半田(1970: 790)は「コロニア」の意味を以下のように説明する。

【用語解説】コロニア(Colônia)

英語のコロニーにあたるが、本文では三つの意味につかっている。第一には、コーヒー農場の家族労働者(コロノ)の住む区域がそれで、ここをコロニアという。第二は、コロノは植民とか、農業移住者という意味もあるので、自作農集団地のことを「植民地」といい、コロニアと訳している。第三は、日系人社会(コロニア・ジャポネーザ)の略としてのコロニ

1 「パウリスタ新聞」(1947年創立)と「日伯毎日新聞」(1949年創立)が1998年に合併、改名された。

2 深沢正雪「南米の日本語版クレオール語「コロニア語」・「海外」という言葉の島国感覚—その1」『ディスカバー・ニッケイ』2017年1月14日発行ジャーナルより。http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2017/1/4/colonia-go-1/(2018年9月20日最終閲覧)

ア³である。二世、三世をふくめたとき在留同胞とか邦人社会という戦前の名称では、どうも包含しきれない内容をもつようになったからである。

日本では「コロニア語」の意味だけでなく、語の存在自体ほとんど知られていないが、ブラジルの日系社会において世代交代が進む今、コロニア語⁴は消滅の危機に瀕している。本稿では、ブラジルの日系移民が辿った歴史や当時の社会状況を踏まえながら、コロニア語の言語的特徴とコロニア語が形成された言語接触の背景、そして変わりゆくブラジル日系社会の中で翻弄されるコロニア語の位置を、主にブラジルの日系移民による記述に基づいて考えてみたい。

2. ブラジル日系移民社会における世代交代と言語シフト

ブラジルへの日本人の集団移住は、1908年6月18日、790名余りを乗せた第1回移民船「笠戸丸」がサントス港に到着した時から始まった。「日系人」と言われる、かつて日本から海外へ移住し、現在でも定住している日本人とその子孫の数は全世界で約380万人。そのうち、ブラジルに在住する日系人は現在約190万人（2017年推定）⁵で、世界最大の日系人口を誇る。ブラジル総人口に占める日系人を含めた「東洋系」人口の割合は約1.1%である⁶。

表1に示した1958年および1988年の2度にわたって行われた全国規模の日系社会に関する調査によると（ブラジル日系人実態調査委員会編1964、サンパウロ人文科学研究所1989）、日系人口の約8割が、サンパウロ州が位置するブラジル南東部に居住することが分かる。

地域	1958年調査	1988年調査
北部(Norte)	5,227(1.21%)	33,000(2.68%)
北東部(Nordeste)	1,765(0.41%)	28,000(2.28%)
南東部(Sudeste)	334,201(77.70%)	974,000(79.32%)
南部(Sul)	78,097(18.16%)	144,000(11.72%)
中西部(Centro-Oeste)	10,679(2.48%)	49,000(3.99%)
不明	166(0.03%)	—
合計	430,135(100%)	1,228,000(100%)

表1：ブラジルにおける地域別日系人口と割合(1958・1988)

- 3 若い日系ブラジル人の間では、日系人との関わりが多く非日系のブラジル人との関わりの少ない人は“japonês de colônia”と呼ばれ、親や祖父母から受け継がれたポルトガル語混じりの日本語を話すとともに、日本語混じりのポルトガル語をも話すという(ギボ2015)。
- 4 ギボ(2015)によれば、「コロニア語」には、ポルトガル語混じりの日本語バリエーションとしての「コロニア日本語」と、日本語混じりのポルトガル語バリエーションとしての「コロニアポルトガル語」があり、“japonês de colônia”(注3参照)は両者を総称し、「コロニア語」あるいは“batianês”(「ばあちゃん語」。ばあちゃんが(と)使う語の意。日本語の名詞「ばあちゃん」に「～語」を表すポルトガル語の接尾辞-êsを付加)と呼ぶという。本稿では、主に移民1世が使うコロニア日本語を「コロニア語」とし、論を進めている。
- 5 (公財)海外日系人協会「海外日系人数」より。<http://www.jadesas.or.jp/>(2018年9月20日最終閲覧)
- 6 外務省HPより。<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brazil/data.html>(2018年9月20日最終閲覧)。ブラジル連邦共和国は、国土面積約851.2万km²、人口約2億930万人、ラテンアメリカ最大の国土と人口を擁する。広大な国土は、北部(Norte)・北東部(Nordeste)・南東部(Sudeste)・南部(Sul)・中西部(Centro-Oeste)の5つの地域に区分され、ブラジル最大の都市サンパウロは南東部に位置する。

次に、日系社会における世代交代と使用言語の状況を見てみよう。1958年調査と1988年調査による世代別割合を表2に、家庭内使用言語割合を表3に示す。1958年には1世・2世が中心であったのが、1988年には2世・3世が中心となっており、家庭内使用言語も日本語中心からポルトガル語中心へと大きくシフトしていることが見てとれる。また、2003年にサンパウロ州の農村部2地点で行った言語生活調査によると、日本語からポルトガル語への言語シフトは3世ではほぼ完了していることが明らかとなった(中東2007a)。

	1958年調査	1988年調査
1世	32.3%	12.5%
2世	52.1%	30.9%
3世	15.5%	41.3%
4世	—	13.0%
5世	—	0.3%
不明	—	2.0%

表2：日系人世代別割合(1958・1988)

	1958年調査	1988年調査
日本語	53.2%	6.3%
日本語・ポルトガル語	32.0%	19.7%
ポルトガル語	14.8%	56.0%
不明	—	18.1%

表3：日系人家庭内使用言語別割合(1958・1988)

1980年代、ブラジル移住の時代は幕を閉じた。1世世代の減少・高齢化、2世・3世世代の台頭に伴い、職業の多様化、都市部への人口集中、高学歴化、非日系との結婚の増加など、日系人の生活も一昔前とは大きく様変わりした。現在、3世・4世・5世の時代を迎え、日本語はもはや生活言語として機能しなくなっている。日系社会に帰属意識を持たない若い日系世代の増加は、エスニック・グループとしての日系社会から求心力を失わせ、80年代後半以降の日本へのデカセギ現象は、日系コロニアの衰退に拍車をかけた。このような状況を、移民八十年史編纂委員会編(1991: 271)は以下のように語る。

更に日系社会に1世が少なくなり、2世、3世が多くなると、非日系人との結婚が多くなる。.....その結果として混血日系人がふえることになり、日系コロニアの境界が不明(ボーダーレス)になる。.....日系コロニアの境界がぼけるといふことは、もはやコロニアという言葉でエスニック・グループである日系社会を枠づけることが出来ないことを意味する。

3. コロニア語形成に関わる言語接触の背景

3.1 ブラジルへの日本人移住者数の推移

戦前・戦後合わせて約24万人の日本人がブラジルへ移住した。図1は、移住が開始された1908年から1978年までの間にブラジルに入国した年別日本人移住者数をグラフにしたものである(三田・堀坂1986: 264に基づき作図。縦軸は移住者数、横軸は入国年)。

ブラジルへの日本人入国者数の推移は、当時の日本・ブラジル双方の政治的・経済的・社会的背景と関わり、大きくは図1に示したような4つの時期に分けられる。それぞれの時期における入国者数と割合を示したのが表4である。

第Ⅰ期は、ブラジル移住が開始された1908年から1923年までの移住初期の時代で、多くの日本人移民が農業契約労働者「コロノ (colono)」としてブラジルに移住した時期である。第Ⅱ期は1924年～1941年までの国策として移民が奨励され、入国者数がピークに達し、日本人集団地としての「植民地」が最盛期を迎えた時期である。第Ⅲ期は日本との国交が断絶された1942年から終戦を経て、国交回復前の1951年までの日本人移住者が途絶えた「空白」の時代、そして第Ⅳ期は、国交が回復した1952年以降の「戦後移住」の時代である。戦後、移住者数は1959年をピークに減り続け、1980年代には100人を下回るようになり、約70年間に及んだ移民の時代は、実質上終焉を迎えることとなった。

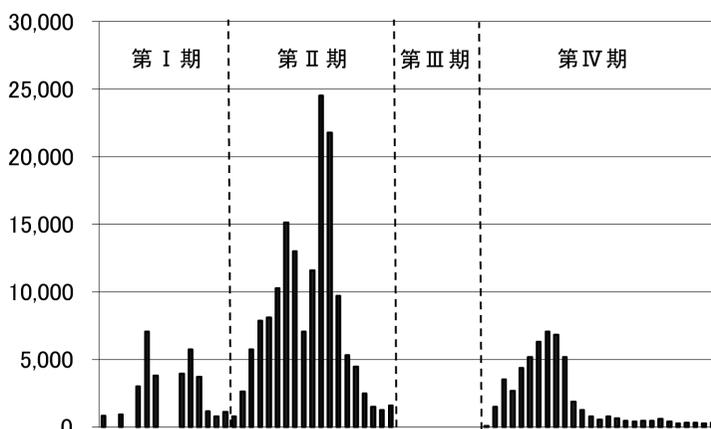


図1：ブラジルにおける日本人入国者数の年別推移

時代区分	入国年	入国者数(割合)
第Ⅰ期：コロノ時代	1908年～1923年	32,590(13.7%)
第Ⅱ期：植民地時代	1924年～1941年	153,676(64.4%)
第Ⅲ期：空白の時代	1942年～1951年	0(0.0%)
第Ⅳ期：戦後移住の時代	1952年～1978年	52,387(22.0%)
合計		238,653(100%)

表4：ブラジル日系移民社会の時代区分と入国者数

3.2 コロニア語の言語的特徴

では、ブラジル日系移民社会において、コロニア語はどのようにして形成されていったのだろうか。まずは、典型的なコロニア語の例を示す(佐藤1957: 82)。

「さあ早くメルカードさ行つて生きのよいペーシェをコンブラセにゃ。」

「ついでにアジノモトばウン・ラッタ買わにゃならん、今なら二百ミルもするべね。」

「メルカード」=mercado(市場)、「ペーシェ」=peixe(魚)、「コンブラ」=compra(「買う」という意の動詞comprarの直説法三人称単数現在形)、「ウン・ラッタ」=um lata(「1缶」の意。umは「1

つ」の意の男性名詞に前接する形容詞、lataは「缶」の意の女性名詞)、「ミル」= mil (当時のブラジルの通貨単位) のように、日本語の文法構造を基本にしなが、ポルトガル語からの大量の語彙借用が行われることがコロニア語の大きな言語的特徴の一つである。ちなみに、「ウン・ラッタ (um lata)」は、ポルトガル語文法から言えば、女性形umaを前接させて「ウマ・ラッタ (uma lata)」とすべきである。このように、コロニア語からは、ブラジルの生活の中でポルトガル語を自然習得したであろう日系移民の姿を見ることが出来る。なお、「アジノモト」は調味料の「味の素」である。

そして、コロニア語のもう一つの大きな言語的特徴は、さまざまな地域方言が混用された文法形式が用いられるということである。例えば上の例では、「早く」のような東日本方言に見られる非音便形、「メルカードさ」「二百ミルもするべ」といった東北方言や、「アジノモトば」といった九州方言、「コンプラセにゃ」「買わにゃならん」といった中国・四国・九州など西日本方言に見られる文法的特徴が混用されていることが分かる⁷。

そのほか、日系社会特有の語彙・語法の使用⁸、待遇表現が少ないことなどもコロニア語の特徴として挙げられるが、これらの具体的な説明については中東(2006)を参照されたい。以下では、言語接触の背景として、ポルトガル語との接触と地域方言間の接触について述べていく。

3.3 言語接触の背景(1)ーブラジル人・外国人移民らのポルトガル語との接触

日本語におけるポルトガル語からの大量の語彙借用は、ブラジルで生活をする上で不可避的であった。半田(1952: 8-12)は以下のように言う。

われわれはブラジルの土をふんだ日からブラジル語を使用すべき運命をおわされていたのである。.....生活文化の差からはいつてくるブラジル語はこれに類似した日本語を駆逐して用いられるようになってくる。そしてこれは、ブラジル語の日本語化あるいは日本語のように使用されるコトバとなつて本来の日本語に代つていくのである。

ポルトガル語からの借用語は、日本語の語彙に存在しない語句や概念を補うだけでなく、呼称、親族名称、数量、時を表す語など、日本語に既存の語彙にも代用された(比嘉1982)。たとえば日本語に翻訳可能な語であっても、例えば「茶碗」と「チジェーラ (tigela)」は別物であり、「コジーニャ (cozinha)」を「お勝手」というと日本臭が強くなるという(半田1952、1980)。

日本人が移住した当初、コーヒー農園にはヨーロッパを中心とした外国人移民も多く働いていた。外国人移民の導入は、日本人が移住する50年前の1850年あたりから増加し、イタリアを筆頭に、ポルトガル、スペイン、ドイツからの移民が多く、ポルトガル語だけでなく、こう

7 沖繩系移民によって使用されるコロニア語は、さらに複雑な様相を呈する(儀保2013)。

8 2世によく聞かれるという「タクシーをつかむ (pegar um táxiより)」「映画が通っている (passar um filmeより)」といった言い方や、呼びかけ語の「おじさん」「おばさん」、「下議(下院議員の略)」「連議(連邦議員の略)」などの略語や「続営(続けて営業する)」「下航(船から降りる)」などの造語。

した外国人移民の言語との接触もあった。『コロニア万葉集』⁹ (1981) には以下のようなコロニア短歌が載る (括弧内は、作者・発表年・掲載頁である)。

我が住める森をへだててイタリヤのコロノの燃やす煙揚がれり

(野口一郎、1957年：pp. 238-239)

独逸訛り多き伯語¹⁰の独逸人と入り組める交渉しつっいらだつ

(徳尾溪舟、1939年：p. 33)

当時、ヨーロッパ移民に比べると日本人移民の割合は、全外国人移民の1%にも満たず、また、外国人移民はブラジル全人口の1割ほどであったことから、ブラジル社会において日本人移民は圧倒的なマイノリティであった。当然のことながら日本人移民たちは言葉の壁にぶつかり、生きていくための手段としてポルトガル語を必死で学ぼうとした¹¹。また、移住当初のコロノ時代においては子弟教育など考える余裕はなく、父兄らはむしろポルトガル語習得を望んでいたという。

「初期渡航者とブラジル語」

笠戸丸組でブラジル語の話せる者は一人もなかった。.....言語不通の伯國人中で、糊口の道を見出すには皆精一杯の苦勞をしたものである。殆んど手眞似舉動で用を足したのであった。斯くの如く言葉で苦勞した関係上、第一にブラジル語を習はねばならんと思ふ心持ちは皆同様であった。同志が寄り集れば、習った言葉を互に教へ合ひ、互に知つてゐる言葉は日本語を使わずにブラジル語を使つたものである。其の環境に生れた子弟はドシドシブラジル語を覚えて、父兄もそれを得意としたもので、.....日常生活の爲に流々轉々と住居を變へ、家庭教育等も不可能其のものであった。斯うした状態の内に第二世はドンドン成長し、遂に日本語の話せぬ第二世が出来て仕舞つた(青柳1941: 398)。

大正七年の初頭、當時私がブラジル時報の編輯に携つて居た頃、自身の興味からリベロン・プレトを中心とした邦人家族の子弟教育に關し、之が調査の爲め、四十餘日を費し行脚したことがあります。即ち其頃日本人は、未だ珈琲園移民の域を脱せず、従つて多く此地方

9 『コロニア万葉集』は、移民が作り続けてきた短歌の全貌を俯瞰することのできる作品集として、ブラジル移民70周年を機に編纂された短歌集である。ここには、戦前・戦後を通じブラジルの邦字新聞・雑誌に発表された作品と、応募作品の中から選ばれた6,634首が収められている。

10 「伯語」とは「ブラジル語(伯刺西爾語)」の意。日系社会では、ブラジルのポルトガル語を「ブラジル語」と言うことが多い。

11 ブラジル移民のためのポルトガル語教科書として、拓務省拓務局編纂の『實用ブラジル語』(1934)や日伯協会発行の『初等ブラジル語獨習書』(1932)などがあるが、実際にはほとんどの移民が、移民船の中で挨拶程度のポルトガル語を学んだだけであったという。

に在住して居たからであります。調査耕地は四十数ヶ所、一千家族近かつたのでありますが、日本語教育などして居る所は一ヶ所も無く、而かも父兄の希望は、如何にしてブラジル語を習得せしむるかにあつたのですが、此ブラジル學校さへ大耕地を除く外は、殆んど存在しなかつたのであります(輪湖1939: 51-52)。

では、実際に移住初期の日本人移民が使用したポルトガル語とはどのようなものだったのか。ブラジル移住50年を記念して編纂された『かさど丸』(1958: 64)の中に「第一回移民のアルバイト “日伯混合語”で結構商賣出来る」と題した次のようなコラムがある。

グワタパラ耕地に配耕された第一回移民の元氣な若い連中は、いまでいうところのアルバイトを考えついた。.....

彼らは日曜日や祭日を利用しては附近のブラジル人農家を訪ねては“ポルコの去勢はありませんか”と注文をとつた。そしてこういつた。

“ヨウ、グワタパラ、ノエ、メジコ、カツパード、ノエ、シュノール、テン、ポルコか、ノンテンか..、テンならテンとファーラ・パラミー”

まことに珍妙な日本語チャンボンのブラジル語だが、彼らの言わんとするところは「私はグワタパラ耕地にいるポルコの去勢の技術者ですが、あなたのところではポルコを飼っていますか。もし飼っているなら、去勢させて下さい」というのである。

ところが、どうみたところで相手が判りつこもなさそうな、こんな“日伯混合語”で結構通じたというのだから不思議である。

日本人移民がブラジル人に対して言ったポルトガル語とは、“Eu (私)、Guatapar (グワタパラ)、no ? (ね)、medico (医者)、capado (去勢豚)、no ? (ね)、senhor (ご主人様)、tem porco (豚がいる)か、no tem (いない)か、tem (いる)ならtem (いる)とfala para mim (私に言ってください)”となる。語彙の羅列、あるいは日本語の語順にポルトガル語の語句を挿入したようなものである¹²。日本人移民のポルトガル語は、コーヒー・ファゼンダ(=fazenda: 耕地)に住むブラジル人やヨーロッパ移民との接触によって自然習得したものであり、かつ、接触の多かったのはコロノという下層労働者階級のしゃべるポルトガル語であったため、悪口や俗語が多く含まれていた¹³という(半田1970)。

12 日本人移民のポルトガル語には、どの人称にも同じ動詞の活用形を用いたり、名詞に冠詞はなく、単数形・複数形の区別もない、「アマニャン・ジャッポン・グランデ・ジャサント・トラバイヤ・ナーダ (Amanh, Japo, grande, dia santo, trabalha, nada. : 明日、日本の、大きな、祭日、仕事は、しない)」のように、ポルトガル語の単語を日本語の語順で並べるなどの特徴が見られたという(半田1970)。

13 半田(1970: 127)は以下の例を挙げる。「あの監督はbravoじゃけん、めったなことは言えん。No pode, filho da me!」(= (耕地の)監督は乱暴だから、めったなことは言えない。だめだ、ちくしょう!)

3.4 言語接触の背景(2)－日本人移民における地域方言間の接触

短期的出稼ぎを目的としたファゼンダでのコロノ生活は、過酷で困難を極めるものであった。日本人移民らは次第に中・長期的出稼ぎへと路線を変更し、借地農、自立農としての道を歩み始める。そして、1920年代には、サンパウロ州内陸奥地へ伸びた鉄道沿線を中心に、日本人集団地としての「植民地」が次々と造成されていく。その数は最盛期で500～600くらい存在したと言われ、徐々に「ブラジルの邦人社会」を形成していった(伯刺西爾時報社1933)。それを後押ししたのは1924年以降の国策移民による大量の日本人移民の流入であり、植民地内外における日本人同士の交流は、移民が持ち込んだ地域方言間の接触をもたらした。

表5は1908年～1962年までの日本人移民の出身地方別入国者数(都道府県別統計は割愛する)と割合を時期別に示したものである(ブラジル日系人実態調査委員会編1964)。地理的な地域区分が必ずしも方言の区分と一致するわけではないが、これらのデータからおおよその傾向を知ることはできる。すべての時期を通じ、最も多いのが九州地方出身者であり、内訳(括弧内は移住者総数比)を見ると、熊本(10.2%)、福岡(8.4%)出身者が群を抜いて多い。九州に次いで多いのは中国地方出身者で、広島(6.0%)、山口(3.2%)、岡山(2.8%)の山陽地方出身者が多く、これに次ぐ東北地方出身者においては福島出身者(5.3%)が突出している。

時期的に見れば、第Ⅰ期には九州・沖縄・中国地方を中心とする西日本出身者だけで全体の8割を占めているが、第Ⅱ期になると東北地方を中心とする東日本出身者の割合も増えてくる。ブラジル日系人の日本語の特徴として多くの研究者らによって指摘される「西日本方言を中心とした方言の混用」は、こうした移民らの出身地域別比率からも十分理解されうることだろう。

出身地方名	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅳ期	合計
北海道	704 (2.2%)	12,329 (8.0%)	2,670 (6.3%)	15,703 (6.9%)
東北	1,840 (5.6%)	20,435 (13.3%)	4,269 (10.0%)	26,544 (11.6%)
関東	1,035 (3.2%)	9,519 (6.2%)	4,681 (11.0%)	15,235 (6.7%)
中部	3,501 (10.7%)	16,061 (10.5%)	2,953 (6.9%)	22,515 (9.8%)
近畿	1,610 (4.9%)	14,690 (9.6%)	3,199 (7.5%)	19,499 (8.5%)
中国	4,455 (13.7%)	22,557 (14.7%)	3,857 (9.0%)	30,869 (13.5%)
四国	1,556 (4.8%)	10,615 (6.9%)	2,943 (6.9%)	15,114 (6.6%)
九州	12,209 (37.5%)	38,879 (25.3%)	13,230 (31.0%)	64,318 (28.1%)
沖縄	5,680 (17.4%)	8,591 (5.6%)	4,829 (11.3%)	19,100 (8.3%)
合計	32,590 (100%)	153,676 (100%)	42,631 (100%)	228,897 (100%)

表5：時期別・出身地方別入国者数・割合(1908～1962)

方言の混用は、世界各地の日系移民社会の日本語に共通して見られる特徴の一つであるが、移民社会によって相違点も見られ、比嘉(1983)によれば、ハワイ日系移民の約5割が中国方言地域の出身者であり、かつ、先着者であったこと、そして中国方言が全国共通語と類似性の高い方言であったため、中国方言がハワイの日本語における共通語の基盤となったのに対し、ブ

ラジル日系移民の場合は、どの方言出身者も移民全人口比の1割に満たなかったため、ブラジルの日本語において共通語の土台となる有力な地域方言がなかったという。

また、ハワイ・ブラジルの両地域において沖縄県出身者が先着者としては最多数であったにもかかわらず、沖縄方言は全国共通語との類似性が極めて低かったために、日系社会の共通語になることはなかった。半田(1952: 7-8)は次のように言う。

ブラジルに於ける日本語は、何よりもまず、労働移民の使用するコトバだということである。そして、日本全国から集った移民の方言がまじり合つてその中でなるべく一般的にわかりやすいコトバだけが通用することになつて存続しているのがわれわれの日本語である。しかしわれわれの移民のコトバはまだ決して北海道(?)のように一つの統一体とはなっていないで各地方で最も数的に又文化的に優力な縣のコトバが主体となつてそれに各縣の方言がまじり合つていることが観察される。たとえばこれをノロエステ地方についてみるとリンス、プロミツソンは九州辯が多分にまじつて一つの標準化が行われているし、アラサツバでは東北なまりがきかれるという具合である。サンパウロ市などではやや北海道的標準化をたどつているように思えるが、ピニエイロス區などへ来るとコチア出の人が多いために四國辯が混つているように思う。

日本人集団地である植民地には、日本人会、日本語学校、青年会、婦人会、産業組合など数多くの団体が組織された。日本人会を中心に行われる相撲や野球などスポーツの試合、天長節、運動会、演芸会などの行事を通じ、植民地間の交流が盛んになる中で方言間接触は活発化し、互に通じにくい方言的要素は次第に淘汰されていったものと考えられる。

だが、方言の混用にも地域差があり、移民の日本語が「一つの統一体とはなっていない」背景には、数的に有力な方言の不在のほか、ブラジルの日系社会がサンパウロ州を中心としながらも、ブラジルという広大な地に作られ発展していったという地理的条件も大きく関わっているだろう。加えて、移住者の多くは農村出身者や地方小都市の方言話者であり、日本国内で全国共通語化(標準語化)が進んだのとは違い、ブラジルの日系社会には標準語といった「コトバのよりどころ」(半田1952: 10)がなく、標準語と方言の違いが意識されることも少なかったために、標準語化への方向も辿ることができなかったという。

4. 日系移民社会におけるコロニア語の位置づけ

4.1 「在伯同邦社会」から「コロニア」へー「空白」の時代を経て

1930年代、日本人植民地は最盛期を迎えた。20年代後半以降から増え始めた日本人移民は、30年代前半には外国人移民総数の半数を占めるようになっていた。『コロニア万葉集』に収録された以下のコロニア短歌からも、当時の邦人社会の様子を窺うことができる。

邦人の多き此の地は伯人¹⁴の商店広告に邦文の見ゆ

(川田千葉路、1952年：p.123)

日本語で「ボラはどうかね」と声かける伯人に笑いつつ買わされている

(深沢喜久雄、1965年：p.256)

邦人社会が安定し発展していく中で、子供移民の増加や二世の誕生は子弟教育への関心を高め、植民地内に多数の日本語学校を誕生させた。その数は1939年時点で486校、生徒数は3万人にも達したという(青柳1942)。いずれは日本へ帰国するという目的のもとに日本人教育を重視した「日主伯従主義」が当時の一般的な子弟教育観であったが、永住と同化を前提としたブラジル教育重視の「伯主日従主義」、また、満州事変以後の国粹主義の影響を受けた「和魂伯才論」など、子弟教育の理念を巡る様々な議論が繰り広げられた(森2006)。

一方、この時期にはブラジルのナショナリズムが台頭し、移民入国制限、外国人同化政策の強化が行われ、1938年には日本語学校が全面閉鎖、1941年には邦字新聞・雑誌が発刊停止に追い込まれ、日本語の使用も禁じられてしまった。1942年に国交は断絶、そして日本の敗戦を迎えた。だが、終戦直後の勝ち組負け組抗争を経て徐々に落ち着きを取り戻していく中、祖国への帰国を諦め、ブラジルの地に永住するという意識が醸成されていく。

かつて「在伯同胞社会」などと自称した移民社会はいつしか、ブラジル人として成長した子弟たちを含めた日系社会を「コロニア」と呼ぶようになった。植民地の訳語である「コロニア」という言葉は、単に戦後使われ始めた日系社会の呼称であるだけでなく、その背後にはブラジル社会の一員として生きていくという決意があり、「ブラジルの日本人」という新たなアイデンティティが徐々に確立されていった。

「在伯日本人」といふ、「在留民」といふ、或は「在伯同胞」という使い古された言葉はすでにブラジルの日系人の實態とは程遠いものになつてしまつた。……戦時・戦後の空白時代というけれども、實は空白どころか、コロニアの最も充實した成長期であり、人間形成期であつたのではないか。戦争のトンネルをぬけて、再び青天が訪れたとき、ブラジルの日系人はもうかつての「在留民」でもなく、「ブラジルの本邦人」でもなかつた。われわれはコロニアとしての成長をとげていた(パウリスタ新聞社1958: 3-4)。

4.2 「日伯混合語」から「コロニア語」へー日系移民にとってのコロニア語

1950年代、コロニアとして再出発を遂げた日系社会では、「日伯混合語」などの呼称に代わって自らの言葉に「コロニア語」と名付け、その姿を記していった(佐藤1957: 81)。

14 「伯人」とは「ブラジル人(伯刺西爾人)」の意。

かくも日常会話が乱雑だが、過去の生活環境を通して出来上つたコロニア語が一つの型をなして殆んどの家庭に滲みこんでいることを悟るのである。ところがこの乱れたコロニア語の中にコロニア自体の歴史と姿が反映しているかのようで何かしら親しみがある。

「乱雑」でありながら「親しみ」のあるコロニア語¹⁵への肯定感は1960年代以降増していき、コロニア語を非難する声をよそに、その存在意義が積極的に見い出されていく。

二世の日本語の特色は、相手が目上の人でも目下の人でも区別なく「です」も「ます」もつけない、ごくデモクラチックな表現であることだ。.....コロニア弁には、これからも、二世に都合のいい日本語がいろいろ作られていくことだろうが、それを日本では使わないと言って、非難してみたところで、それは一種の懐古趣味的な感慨で、時代と場所と環境とで、どんどん変化していく生き物のような言葉を押さえつけるわけにはいくまい。.....コロニアの日本語は日本のそれとちがってもいい。それが必然的な言葉の運命というものなのだ(アンドウ1966: 46)。

単に言葉が“崩れて”混ってなどいるのではない。生きていくうえでの戦略(戦術)として、われわれは故意に混ぜ、苦勞して両語をこねあげているのである。その結果今コロニアで流通しているものを、コロニア語という。こういったコロニア六十年史の最大の文化遺産たる“コロニア語”を除いて、日本語を中核に使用する人口とポルトガル語を中核に使用する人口.....の両方の社会層に同時に訴えをもちうる戯曲を書くべき言葉はないのである。.....単に両語が混っているのでもなければ、また、方言にずっぷり浸っているでもない。言葉の崩壊などは笑止な謂いである。変転しない言語などはどこにもない(前山1972: 116)。

そして、コロニア語は日本語教育においても重要な位置を占めていくようになる。1954年、コロニアで初めて出版された『全伯児童作文集』の作文は、歴史的仮名遣いを用いたコロニア語で書かれており、「コロニヤの児童の綴方参考書として快適」であると評されている。以下は、小学1年生部門の最優秀作文に選ばれた「ボクノウチ」の冒頭部分である(p.13)。

ボクノウチハメカニコデス。オトウサンノホカニジユキアノニイチャント、カンポリンポノニイチャント、ソレカラマダホカニ五人キマス。ミセデハイツデモイソガシソウニハタライテキマス。オカアサンハ、ジユキアノネエチャント、トミチャントクゼンニヤラヤツテキマス。ウラノウチハコンドガツカウニナリマシタ。ボクハガツカウガスキデス。

15 「乱れと親しみ」という相反する評価は、当時の日系知識人のコロニア語観を代表していると細川(2008)は述べる。

[筆者補注：僕の家はメカニコ(=mecânico：機械工)です。お父さんのほかにジュキア(=Juquiá：地名)の兄ちゃんと、カンボリンポ(=Campo Limpo：地名)の兄ちゃんと、それからまだほかに五人います。店ではいつでも忙しそうに働いています。お母さんは、ジュキアの姉ちゃんともみちゃんとクゼンニヤ(=cozinha：料理)をやっています。裏の家は今度学校になりました。僕は学校が好きです。]

コロニア語への日系人らの思いは、「コロニア版」教科書と言われる小学生用日本語教科書『にっぽんご』(初級用8巻、中級用4巻)の編纂へとつながっていく。1961年に発刊された初級用第1巻の中から「オニブス」の項の一部を以下に引用する(pp.62-63)。

オトウサント、オニブスデ サン・パウロヘ イキマシタ。
アトカラ クル ジドウシャガ ズンズン オイコシテ イキマシタ。
パストノ ソバラ トオリマシタ。

[筆者補注：オニブス=ônibus(バス)、パスト=pasto(牧草地)]

コロニア版教科書の中心思想は、「ブラジルの国民性の上に立って、コロニア独自の精神をつちかい、ブラジルの繁栄のために挺身する人物を育てる」ことであり、「ブラジルへの愛情、日系人としての自覚と正しい誇りを持たせたいという意図からブラジルへの移住、コロニアの歴史など」も教科書の内容に盛り込まれ、「低学年用には『ミーリョ』『オニブス』などのようにコロニアでふだん使われているブラジル語単語がそのまま用いてある」のが大きな特徴である。

そして、「本教科書の使用により、正しい日本語教育の基本原則が確立されたことは、コロニア将来の発展の上に大きな希望を投げかけるものである」と日系人らの間で絶賛され、1963年にサンパウロ州政府公認の教科書として認定を受けたコロニア版教科書『にっぽんご』は、瞬く間にブラジル全土に普及したという(伯国日本語学校連合会1966)。

戦後初めて作られた日系子弟のための教科書は、まさに、コロニア人によるコロニア語で書かれたコロニアの子供たちのために作られた教科書であった。

4.3 否定される「コロニア語」-「日本の日本語」との対峙

1970年代以降、日本とブラジルとの学術交流が活発化する中で、日本語専門家の派遣制度や日系人教師の日本研修制度などにより、日本語教育環境の本格的整備が進んでいった。日本人研究者らによってコロニア語は学術的研究の対象として取り上げられるようになったが、「日本の日本語」と対峙する中で、コロニア語は教授言語として排斥すべき対象となっていった。

中でも、1969年、サンパウロ大学客員教授として派遣された野元菊雄によるコロニアの日本語を巡る種々の発言は、当時の日系社会に大きな衝撃を与え、様々な議論が邦字誌上を賑わすこととなった。一例として野元(1969: 69-70)を以下に引用する。

コロニアの日本語こそポルトガル語が多い。.....外来語を沢山とり入れることができるのは日本語の生命力を現わすものと思うから、このこと自身は非難すべきではないと考えるが、日本の日本語のことは常に頭に置いて、日本ではどう使うかを教えるべきだろう。たとえば、オニブスといったのでは日本語にならない。バスといってもらいたい。.....標準的な日本語を教育しないとせっかく日本語で書いても、日本語を話す人の多数派である日本の日本人に理解できないことになるおそれがある。

日本の日本語に英語からの外来語が多いことは「日本語の生命力を現わすもの」として正当化し、コロニアの日本語にポルトガル語が多いことは「多数派である日本の日本人に理解できないおそれがある」として非難する。アンドウ(1966)が、「ごくデモクラチックな表現」と評したコロニア語における待遇表現の少なさに対しては「ブラジルの日本語が非常に乱暴だとの印象は拭えない」とし、「コロニア弁には、これからも、二世に都合のいい日本語がいろいろと作られていくだろう」というコロニア語への期待に対しては「率直に言って、この日本語は消滅の運命にあるように思われる」と野元は結論付けた。

権威ある日本からの日本語専門家によるコロニア語批判は、前山(1972)の言う「コロニア六十年史の最大の文化遺産たる」コロニア語の地位を貶め、日系人らが築き上げたコロニア語による日本語教育を否定し、彼らが理想とした日本語教育の理念を根底から覆すこととなった。日本語として教授すべきは「正しい日本語」、すなわち「日本の日本語」であり、「ブラジル日系人の日本語」、すなわち「コロニア語」は教授すべき日本語からは排除され、その後、コロニア語はブラジルの日本語教育から完全に姿を消すこととなった。

ブラジルの日本語教育におけるコロニア語の地位の変化は、1990年に発刊された日本語普及センター¹⁶の会話教科書『改訂一、二、三にほんごではなしましょう』教師用指導書1にある以下の記述(p.Ⅱ)に象徴的に表れている。

「チャンポン語は絶対使うな」

名詞だけ伸介語を使うようなチャンポン語(「先生は、あのサーラでウマオーラ、アウラする」など)は絶対に使わないでください。生徒に悪影響を与えます。.....チャンポン語を使うことは、折角キチンとした日本語を教えながら、それを毎回黒板拭きで消しているようなものです。日本語の先生みずからが、日本語の消滅に拍車をかけるようなことをすべきではありません。

コロニア語に対する否定的な評価は、日本の日本語教育現場でも行われた。山下(1993)は、ブラジル日系日本語学習者を対象に行ったインタビューの談話の日本語を取り上げ、「ブラジルで一般化した日本語」、すなわちコロニア語は「不自然な日本語」であるため、日本語として

16 現在のブラジル日本語センター(CBLJ: Centro Brasileiro de Língua Japonesa)。

「正すべき」であり、ブラジル日系人に対して「日本語教育のやり直し」を考えることが必要であると述べる。以下は、山下(1993: 131)が冒頭で論考の趣旨説明をしている箇所である。

本稿では、.....すでにブラジルでは標準的な日本語として、一般的に用いられているが、日本に来てその表現を用いると極端な言いかたをすれば時代錯誤的であったり、方言色が強く、日本で学生生活や社会生活をするのに支障があると思われる表現を中心に例をあげ、正したほうがよかろうと思われる点について、どのような練習が必要かを考えたいと思う。

5. 「移民言語としての日本語」から「外国語としての日本語」へ

1990年代後半以降、ブラジルにおける日本語教育は劇的に変化した。国際交流基金による海外日本語教育機関調査によれば、従来、日本語学習者のほとんどが「学校教育以外」、つまり日系団体や個人が経営する日本語学校で学ぶ学習者であった。しかも学習者のほとんどが日系子弟であり、このことは、日系人が多く居住するブラジルの日本語教育の特異な点であった。しかし、1980年代後半から始まった初等・中等教育機関における外国語教育プログラムや、高等教育機関における日本語講座の開設などにより、90年代後半以降、「公教育機関」において、第二外国語として日本語を学習する人が急増している(中東2007b)。

公教育機関の日本語学習者の多くが、非日系学習者であり、成人学習者も多く含まれている。非日系・成人学習者の増加は、学校教育以外の日本語学校でも見られる傾向であるが、日系・非日系を問わず、日本語学習の動機として、アニメ・漫画をはじめとした日本のサブカルチャーへの興味・関心の高さがあり、日本へのデカセギの恒常化も学習者数を順調に増やし続ける要因となっている。

かつて、ブラジルの日本語と言えば日系移民の日本語、つまりコロニア語であり、ブラジルの日本語教育と言えば日系子弟への日本語教育であった。時は流れ、学習者だけでなく日系の日本語教師にとっても日本語はすでに外国語となっており、「移民言語としての日本語」は今やすっかり影を潜め、「外国語としての日本語」に取って代わられた。しかし、依然としてブラジルの日本語学習者の6割以上が学校教育以外の日本語学校で学ぶ学習者であり、それを支えているのは、まさに日本人移民がブラジルに築いた日系社会なのである。

6. 日系人のデカセギ還流と「デカセギ語」の創出

1990年の「出入国管理及び難民認定法」の改正により、日系3世まで就労に制限のない在留資格が与えられたことから、「デカセギブーム」が到来、日系人のデカセギ還流が本格化し、日本国内にブラジル人が激増した。ブラジル人の多くは製造業に従事し、自動車、電機関連工場などが集中する東海地方や関東・甲信地域の内陸工業都市に集住する傾向にある。2008年秋のリーマン・ショックによる経済不況で多くのブラジル人が失業し、ブラジル人は減り始めたが、現在でも約19万人が日本に暮らし、長期滞在化・定住化が進んでいる(法務省2018)¹⁷。

17 在留外国人統計より。http://www.moj.go.jp/(2018年9月20日最終閲覧)

デカセギによるブラジル人の日本への長期滞在・定住化は、「デカセギ語」(イシ2000)、あるいは“dekassegûês”(「デカセギ」dekasseguiにポルトガル語接尾辞-êsを付加)(ギボ2015)と呼ばれるブラジル語と日本語との言語接触による言語混交をもたらした。Gomen(ごめん)、onegai(お願い)、arigato(ありがとう)、yakin(夜勤)、zangyo(残業)、soji(掃除)、bento(弁当)など、職場や日常生活でよく耳にする日本語をポルトガル語に借用したり、patinqueiro(パチンコをする人)、tambozal(田んぼ)のように日本語にポルトガル語接辞を付加した造語や、Ele está gambateando.(彼はがんばっている:gambateandoは「がんばって」をポルトガル語動詞化したgambatearの現在進行形-ando)のような言語混交は、ブラジル人労働者の中で頻りに観察される言語現象¹⁸であるという(重松2007)。

100年以上も昔、ブラジルに集団移住した日本人が「コロニア語」を創出したのと同様な言語現象である点が面白い。だが、「コロニア語」と同様、日本に暮らすブラジル人の中で生まれた「デカセギ語」も、いずれは消えゆく運命にあるだろう。

このようなエスニック・コミュニティで見られる言語接触・混交だけでなく、近年、日本に在住する外国人の急増と、多国籍化・多言語化が進む中、言語を異にする外国人の間では、「リンガフランカ(共通語)としての日本語」が使われているという(河原2005)。フィリピン語風の日本語、中国語風の日本語、ポルトガル語風の日本語…等々を話す人々が、互いにコミュニケーションをするための日本語は「ビジン日本語」であり、そう遠くない将来、クレオール化して広まるのではないかと河原(2018)は予想する。

7. 「コロニア語」の再評価

ブラジル移住開始から110年が過ぎ、コロニア語は日系社会から消え去ろうとしている。そのような中、ブラジルでコロニア語の再評価の動きが見られる¹⁹。以下は2018年1月10日発行の「ニッケイ新聞」²⁰に掲載されたブラジル日文学会会長中田みちよ氏の発言の一部である。中田氏は、作品にコロニア語を使うことで、日本とは違う日系社会の独自性が生まれるとともに、日本語の苦手な日系社会の若い世代の参加も期待できると述べる。「ブラジルは日本の一地方ではない」「目標を日本での評価に置かなければいい」という氏の発言は、1950～60年代に日系知識人の一人であるアンドウ(1966)が「コロニアの日本語は日本のそれとちがってもいい」(4.2参照)と、日系人としてのアイデンティティをコロニア語の中に見出す姿を彷彿させる。

18 岡山県内のブラジル人集住地域である総社市に暮らすブラジル人の間でも、これと同様なポルトガル語への日本語借用や言語混交の使用が見られる(中東2014)。例：O trabalho está muito *isogashi*。(仕事がとても忙しい)／Vou fazer três horas de *zangyo* hoje。(今日は3時間残業がある)／*Onegai* levar este *daisha* de baixo do *sempuki*。(扇風機の下にあるこの台車を持って行ってください)

19 2019年9月に開催される第8回ブラジル言語学オリンピックでは、日本人移民110周年を記念し、コロニア語の「ヨラ」がテーマに選ばれた。毎年、文化的多様性を表す言葉が採用されるという(「サンパウロ新聞」2018年6月14日。<http://saopauloshimbun.com>)。「ヨラ」とは「私たち」の意で、ポルトガル語の一人称単数形eu(日系コロニアでは「ヨ」と発音される)+日本語の複数形接辞「ら」を付したコロニア語である。

20 <https://www.nikkeishimbun.jp/2018/180109-01colonia.html>(2018年1月10日)

私自身もコロニア語は「きたない言葉」「教養のない言葉」「下卑た言葉」として認識していた。だから、雑誌の編集をするときはコロニア語を修正してきた。あるいはカッコ内に日本語を入れた。日本サイドで読まれるとき解されないだろうという考えからである。

すると中のひとりが十名足らずの日本人会員のために、それをする必要はないのではないか、と反発してきたのである。そうかもしれない、とこの問題を胸に抱えて日を過ごしながら、相変わらず、コロニア語を修正しつづけた。

しかし、一歩仲間から離れて、道端で話すときはコロニア語を使わないと、相手と意思疎通がはかれないという現実がある。その立場で考えると「コロニア語」こそ日系社会の宝かもしれないということに気がついた。

私たちこそコロニアに生きている言葉、使われている言葉で書き残さなければならないのではないか。……ブラジルは日本の一地方ではない。地方支部ではないと考えつつ、どうすればブラジルの独自性が樹立できるのか。……「そうか、コロニア語で書けばブラジルの日系社会の独自性が生まれるのか」

なにも難しく考える必要はない。目標を日本での評価に置かなければいいのである。……コロニア語というのは話し言葉に多用されるから、そのまま書けばいい。すると、使い慣れたコロニア語なら日系社会の比較的若い層も参加できるのではないか。

8. おわりに

かつて日本語の研究と言えば、国内の日本語における規範的な標準語研究や歴史的研究が中心であった。高度成長期以後の人口移動による人的接触の増加や全国共通語化の普及により、日本人の言語生活における日本語の多様性が顕在化し、社会言語学の隆盛と相俟って、1970年代以降、日本語の地域変種・変容研究が盛んに行われるようになった。90年代になると、全国共通語化はほぼ完了し、急速に衰退した地域方言はすでに言語システムとしての機能を失ってしまった。そして、かつて多くの地方出身者が抱いていた方言コンプレックスの意識は薄れ、方言が再評価される方言尊重の時代を迎えた。

日本語教育においても、これまで教えられるべきは標準日本語であり、地域方言や若者語などの言語変種は日本語学習の場から排除されてきた。しかし、1980年代以降、とりわけ90年代以降は日本に在住する外国人が激増、それまでは比較的大都市に集住していた外国人は日本全国へと居住地を広げ、従来、大学で学ぶ留学生教育が主流であった日本語教育は、地域社会に暮らす外国人への日本語教育へと拡大することとなった。

地域変種の地位の上昇に伴い、かつては全国共通語の発信源であったテレビ・ラジオにも地域方言や若者語があふれ、昨今のアニメや漫画、ゲームといった日本のサブカルチャー・ブームとインターネットの普及は、海外にいながらにして、生きた日本語を学べる場を提供した。このような日本語教育を巡る学習環境の大きな変化は、日本語教育の現場に標準日本語以外の言語変種を学ぶという新たなニーズを生み出した。

加えて、グローバル化を背景とする消滅危機言語・言語接触研究への関心の高まり

から、ハワイ、カナダ、ブラジルなど海外日系移民社会における日本語研究に加え、旧統治領であったミクロネシア(旧南洋群島)、台湾、朝鮮半島、中国東北部(旧満州)、サハリン(樺太)などに残存する日本語の研究も積極的に行われるようになった。これらはいずれも、他言語との接触・変容を含んだ日本語の下位変種として扱われ、従来、言語研究の対象として重要視されてこなかったが、近年になって、ようやくその価値が認められるようになった。

ブラジルにおける「コロナ語」の再評価という動きも、このような時代の流れの中で、そして消滅に瀕した今だからこそ生まれたのかもしれない。

付記 本稿は、文部科学省科学研究費補助金・若手研究(B)〔課題番号20720140〕による研究成果の一部である。

参考文献

- 青柳郁太郎(1941～2)『ブラジルに於ける日本人発展史(上・下)』ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会
 アンドウ・ゼンバチ(1966)「コロナにおける日本語の運命」『コロナ文学』2
 イシ・アンジェロ(2000)「『文化』の翻訳」『境界の「言語」』新曜社
 移民八十年史編纂委員会編(1991)『ブラジル日本移民八十年史』移民八十年史編纂委員会
 河原俊昭(2005)「外国人への言語サービスとは何か」『日本語学』24(13)
 河原俊昭(2018)「外国人集住都市の言語問題—日本語で格差を生み出さないために—」『日本語学』37(9)
 儀保ルシーラ悦子(2013)「言語接触論から見たブラジル沖縄コロナ語」『移民研究』9
 ギボ・ルシーラ(2015)「コロナ語—日本語とポルトガル語の混成語—」『ポルトガル語圏世界への50のとびら』
 上智大学出版
 コロナ万葉集刊行委員会編(1981)『コロナ万葉集』コロナ万葉集刊行委員会
 佐藤常蔵(1957)『ブラジルの風味』日本出版貿易株式会社
 サンパウロ人文科学研究所(1989)『ブラジルに於ける日系人口調査報告書—1987・1988』サンパウロ人文科学研究所
 重松由美(2007)「在日ブラジル人若年層の使用する日本語における形態的統合」『ラテンアメリカ研究年報』27
 全伯教育研究会(1954)『全伯児童作文集』全伯教育研究会
 中東靖恵(2006)「ブラジル日系社会における言語の実態—ブラジル日系人の日本語を中心に」『国文学 解釈と鑑賞』71(7)
 中東靖恵(2007a)「ブラジル日系移民社会における言語生活—ブラジル日系人の言語能力意識と意識にかかわる諸要因」『大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書』6
 中東靖恵(2007b)「ブラジルにおける日本語教育の新たな潮流—ブラジル社会に開かれた日本語教育へ」『岡山大学文学部紀要』47
 中東靖恵(2014)「岡山県総社市に暮らすブラジル人住民の言語生活—外国人住民の日本語学習支援を考える—」『社会言語科学』17(1)
 日伯文化普及会編(1961～4)『にっぽんご』1～12、日伯文化普及会
 日本移民五十年祭委員会(1958)『かさど丸』日本移民五十年祭委員会
 日本語普及センター編(1990)『改訂 一、二、三、にほんごではなしまししょう 教師用指導書』日本語普及センター
 野元菊雄(1969)「ブラジルの日本語」『言語生活』219
 パウリスタ新聞社(1958)『コロナ五十年の歩み』パウリスタ新聞社
 伯国日語学校連合会(1966)『幾山河』伯国日語学校連合会
 半田知雄(1952)「ブラジルにおける日本語の運命」『時代』15
 半田知雄(1970)『移民の生活の歴史—ブラジル日系人が歩んだ道』トッパン・プレス
 半田知雄(1980)「ブラジル日系社会における日本語の問題」(一、二、完)『言語生活』346～348

- 比嘉正範(1982)「ブラジルにおける日本人移住者の言語適応」『ラテンアメリカ研究』4
- 比嘉正範(1983)「『社会方言学』の樹立を目指して」『現代方言学の課題』第1巻、明治書院
- 伯刺西爾時報社(1933)『伯刺西爾年鑑』伯刺西爾時報社
- ブラジル日系人実態調査委員会編(1964)『ブラジルの日本移民 記述篇』東京大学出版会
- 細川周平(2008)『遠くにありてつくるもの』みすず書房
- 前山 隆(1972)「トマテとコンピュータ縁起」『コロニア文学』18
- 三田千代子・堀坂浩太郎(1986)「日本とブラジル」山田睦男編『概説ブラジル史』有斐閣
- 森 幸一(2006)「ブラジルの日本人と日本語(教育)」『国文学 解釈と鑑賞』71-7
- 山下暁美(1993)「やり直す日本語一試案(ブラジル日系日本語学習者対象) ―話し言葉を中心に―」『講座日本語教育』28
- 輪湖俊午郎(1939)『バウル管内の邦人』日伯新聞社